ずいそう

2人の生き方に学ぶ

連日、テレビや新聞は米国のトランプ大統領で明け暮れている。英国がEU離脱を決めたときのように、国を支える中間層の人たちの収入が下がり、閉塞感のある社会になると、アメリカファースト（保護主義）を掲げて登場したトランプのような、ポピュリズムを煽る政治家が人気を博する。この状況は、かつてのレーガン大統領の誕生の時と非常に似ている。米国では、絶対にできないだろうという四つのことがあった。それは、黒人の大統領、女性の大統領、70歳を超えた大統領、そして銃の所持禁止だ。アメリカ人はジョークが好きだ。ヒラリー・クリントンの元ボーイフレンドが、ガソリンスタンドで働いていたそうだ。「もし、ヒラリーがその彼と結婚していたら、クリントン大統領は誕生していなかっただろう」というエピソードに対して、「いや、それは違う。そのボーイフレンドが、大統領になっていただろう」というほど、ヒラリーは女性にしては少し強すぎたのだろうか。

私は13年前、レーガン大統領が亡くなった直後のアメリカを訪れていた。空港、駅、ホテルといたる所に半旗が掲げられていて、チェックインの時も、ベルボーイが「私たちの弔意を表している」と誇らし気に説明をしてくれた。その日の夕食のとき、普通は政治の話をするのはマナー違反だが、支持政党を超えてみんながレーガンを大好きだったと言ったので、私は驚いた。彼の国葬には、日本以外の各国からそうそうたるメンバーが参列していた。どうやら、レーガンへの評価は諸外国と日本の政府とで違っていたようだ。ロナルド・レーガンは、69歳の時に大統領になった。77歳まで働き、93歳でその生涯を終えた。貧しい家に生まれ、努力して大学を卒業し、ラジオ局のアナウンサーになり、後に俳優となった。31歳の時、アカデミー賞をとった「カサブランカ」の主役候補だったことはあ

まり知られていない。私は、主役になっていたら大統領にはなっていなかっただろうと話をした。すると、彼が主役になっていたら絶対にヒットしていなかったから大丈夫とジョークで返された。

一方、ドナルド・トランプは裕福な家に生まれ、父親の不動産業を1980年代のレーガン時代の好景気を背景に、さらに発展させた。その後、巨額の負債を抱え、三度も倒産を経験している。1990年代後半からは、その事業を復活させてきた。まさに、幾つもの浮き沈みを経験して70歳で大統領になった。

この2人のように、一つ一つのステップで経験してきたことを次に繋げていく努力は、今の日本人に欠けているチャレンジ精神ではないだろうか。日本では、職業を転々としている人の評価は低く、この道一筋何十年という生き方が美徳とされている。しかし、人は大なり小なりみんな挫折や失敗を繰り返しているはず。

上岡 條二●学校法人白鷗大学理事長

その道を貫き通せる人は、ほんの一部である。もちろん、レールが敷かれている道を安全に行くのも人生だが、常に夢を追いかけ、チャレンジする生き方もまた人生である。

白鷗大学のモットーの一つに、こんな言葉がある。「人生でつまずくことがあるが、それは恥ずかしいことではない。むしろ、そのつまずきから立ち上がることができないことの方が恥ずかしいことである」。

69歳と70歳で就任したこの2人の大統領は、「立ち上がる」ことの大切さを、私たち日本人に身をもって教えてくれているような気がしてならない。

いま、次の大統領候補としてミシェル・オバマの人気が出ている。もし彼女が選ばれれば、アメリカで絶対できないだろうといわれてきた人種・性別・年齢を越えた、銃廃止を実現するチャレンジャーにきっとなるはずだ。